



ひらほく新聞

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく)山本直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

「ひらほく新聞」で検索!
★感謝で継続12年目に突入★
<http://www.hirahoku.com/>
☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!



東京2020五輪に続き、パラリンピックでも選手たちの熱い活躍が目覚ましい。パラ開幕直前の8月22日、東京五輪・パラリンピックの公式文化プログラム、『MAZEKOZE アイランドツアー』の世界配信が始まった。一人ひとりが互いを認め合う「多様性と調和」を体現する素晴らしい映像である。

4年前から毎年8月には、障がいの有無に関わらず、みんなで作って楽しむ祭り「あつぎうちやませフェス」にボランティア参加している。「みんなちがって、みんないい」、多様性を認め合う調和、共生の世界の理解を一人でも多くの方へ届けたい。

パラと歩む皇室

東京パラリンピック開会式で天皇陛下が開会を宣言。天皇が名誉総裁を務めるのは今回が初めて。国内で障がい者スポーツが盛んになったのは、皇室の後押しがあった。

1964年の東京パラリンピックは、前段で上皇ご夫妻の後押しで準備が進められた。皇太子時代の上皇さまが名誉総裁を務められ、「このような大会を毎年行えれば」と大会関係者の背中を押された。翌年の第一回全国障がい者スポーツ大会に上皇さまが出席。以後、皇太子の公務に。98年の長野冬季パラリンピックは、皇太子時代の天皇陛下が名誉総裁を務められた。今回、陛下の名誉総裁での開催でパラスポーツ発展の象徴となる。(8/26読売夕刊)

共生社会の実現へ向けて

『MAZEKOZE アイランドツアー』は、「共生社会の実現へ向けて」、29年前から、生きづらさを抱える人々たちを支援する活動を行ってきた、東ちづるさんが、構成、キャストイング、演出、総指揮を取った。大がかりに制作された映像は、多種多様な出演者153名のパフォーマンズが実に感動的。「ませこぜ」で「共に生きよう」という力強いメッセージが発信されている。9つの島を飛行機でめぐり、それぞれの島で、性別、国籍、障がいなど、あらゆる垣根を超えたパフォーマンズを披露。☆9月末までの限定公開。ぜひ、ご覧下さい。↓



あつぎうちやませフェス2021

2018年春にADHD(注意欠如・多動症)女子、雨野千晴さん(ハンドルネーム)と出会い、その年夏からスタートできた、障がいの有無に関わらず、みんなで作って楽しむ祭り「あつぎうちやませフェス」に、以来毎年夏の開催にボランティア応援している。

毎回、多様性を認め合う「みんなちがって、みんないい」を掲げ、多くの催しが企画されるが、コロナ禍が続く今年は、「ごちゃまぜ作品展」と題し、厚木市内の飲食店など7店舗の店内や、あつぎロードギャラリー(厚木バスセンター前地下道)に障がい者のアート作品が展示され、コンテストとして投票も行われた。併せて、8月21日には、「ポリバケツにガムテープを貼った手作り太鼓でロックンロール!」忌野清志郎より「ロックンロールの原型」と評された、厚木市に本拠地を置くロックバンド「サルサガムテープ」の迫力満点なライブがオンライントレージが配信された。音響機材や本格的な撮影等、会場設営の準備に参加させていただき、有難くそのまま近くで生ライブを鑑賞、13人全員が一体となっ

て共に楽しみ、盛り上がるその迫力とにかく圧倒された。オンラインで視聴された方のパソコンやスマホの画面を通して、その熱気が伝わり、多くの方に勇気、元気が届いたと思う。

前出、『MAZEKOZE アイランドツアー』でも、「音」と「言葉」を使った「歌・音楽」は、全世界・全人類共通のとても影響力の強いアートであるというメッセージがあった。自ら

の出来ることを最大限に、自分から前面に表現した時、そこには最幸のエネルギーが生まれ、周りに拡散される。まさにその瞬間を有難く実感させていただいた。再び目の前で多くの方へ生ライブを披露できる日が来ることを祈る。

■サルサガムテープが出演した「ハートネットTV」【アイタイ!】多様な生き方へのエール
・未来へ17アクションN
HK公式動画



障害を価値に変える分身ロボット Orilineの挑戦



サルサガムテープのライブに続いて行われたのが、感動溢れる「吉藤オリイ氏オンライン講演会」。

オリイさんのものづくりの原点には、小学5年から中学2年までの約3年間の不登校の過去があり、その期間に孤独を埋めてくれて夢中になった「折り紙」の存在があった。そして、不登校を乗り越えた先の工業高校で電動車椅子の新機構発明に関わり、そこからの縁で早稲田大学へ。

グループ内でのスタッフの発信から一部抜萃する。「心が自由ならどこでも行ける」「障がいがあるからできないではなく、どうしたらできるか、制限がある中であきらめないでどういう方法があるかを常に考える行動する」「障がいがあることが不幸なのではない。社会とつながれないこと、役に立てることがないと思ってしまうこと、つながりが持てないことが、なによりも人はつらいもの。更に増えていく高齢化社会に、希望を持って、憧れられる世界を作っていくことで、できないことがあって

も別のやれる方法があると知れば人生に光がさす」ライブの会場運営のため聴けなかったのも、さっそく新刊書籍を拝読した。

「夢中になれる」を見つける提案
世界中に注目される発明家が、次世代に伝えたいこと、きみが「したいこと」だけがきみの一生をささえる。

「夢中になれる」と、多くの若者たちへ、ぜひともお勧めの書籍だ。



編集後記

かつて介護の初歩的な資格(旧ヘルパー2級)を受講した際に、車椅子を利用する体験研修があった。ほんのわずかな段差や坂道など、気を使いながら押すのも大変だが、実際に乗ってみて、その視線の低さや伝わってくるかなりの振動、スピード感、その恐怖を体験、よい経験をした。

今月号を通じて伝えたい思い、それは、障がいを超えよう、とかというのではなく、「それぞれに違った多様性、その人だけの特性を理解しあおう」ということ。そして、特別視することなく、まぜこぜごちゃまぜで、共につながっていかうということ。

あつぎこちやませフェス主催の雨野さんは4年前、「サルサガムテープをステージに呼びたい」とブログに妄想、多くの仲間が応援して、今回その夢が叶った。最幸の瞬間に立ち会うことができ、有難く幸せを共有。さらに物語は続いていく。

オリイさんの教え、人は「託す」という能力をもっている。いつか人生の終わりがきても、その挑戦と失敗の数々が、次の誰かの生きる力になり、引き継がれていく。あなただけの多様性を引き出す一助となれたらと、この筆を続けていく。

自分を信じる力 仲間を信じる力

あつぎこちやませフェスの一連の企画で8月22日には、映画「あまのがわ」のオンライン上映会が開催され、有難く観賞した。この映画には、あの分身ロボットオリヒメが登場する。

親との葛藤に悩み不登校となる(心をなくした)女子高生が、全身が不自由な(身体をなくした)青年の操るロボットと出会い、神秘の島・屋久島へ自身の心を探す旅に出かける物語。

古新舞監督(原作・脚本も)による映画で、第31回東京国際映画祭に特別招待作品として出品された。

古新監督にも幼少期、いじめと引きこもりの経験があり、現在の活動につながっているという。そして、吉藤オリイさんと監督の縁をつないだのは、4歳で交通事故で寝たきり、20年間、学校も通えず友達も居ない絶望の入院生活、唯一動く顎を使ってPCを操作し、2013年にオリイさんをネットで見つけてオリイとネットで見つけてオリイと開発に参加、その後秘書となった番田雄太さん。映画撮影の直前、28歳という若さで亡くなった番田さんは、作品のテーマである「一人との出会いの素晴らしさ」「自分の人生を切り

開いていくことの大切さ」を教えてくれたという。彼の「心が自由なら、どこへでも行けて、なんでもできる」という言葉は、コロナ禍で社会が一変した現代にこそ不可欠なメッセージであり、「自分を信じる力、仲間を信じる力」を大切に、番田さんが遺してくれた思いを作品を通じて皆様に届けられたことをとても光栄に感じると監督は語る。(8月に刊行、小説「あまのがわ」あとがきより)

オリイさんは、番田さんが自らの秘書だった当時、オリヒメを使って働く方法を模索、分身ロボットカフェのアイデアへとつながった。そしてその頃、何人かのALS(筋萎縮性側索硬化症)の患者さんと出会った。その中の一人、20代で発症していて、オリヒメを遠隔操作して学校で授業を行うなど、新しい働き方を模索していた WITHALS 代表の武藤将胤さんとは意気投合し、現在も盟友。

パラリンピック開会式、いつか空飛ぶことを夢見る片翼の少女の物語で、そんな彼女に空を飛ぶ勇気を伝える、光の集団のリーダー、デコトラックのブーン役を務め上げ、長年の夢を叶えた武藤さん。彼らの思いの強さにとにかく圧倒される。さていざ、我々は…。

生まれてから母が泣いたところを見たことがない。今までたくさん泣いたから、どんなことがあってももう泣かないと決めたらしい。そんな両親で良かった。障害児学級で過ごす事を選ばなかった。小学校も中学校も通常のクラスで姉は過ごした。姉は友達と楽しく過ごすことが嬉しくて、自分のできることを頑張り、僕より勉強をしていた。でも、毎晩遅くまで姉のためになることや法律を調べたりしていた母が、姉にひどいことを言う人にも、頭をペコペコ下げていたのが嫌だった。障害児として生まれただけで、みんなと同じクラスで過ごす事がこんな大変なおかしいと思

った。僕も悔しかった。みんな同じに過ごさなければ解ってもらえるはずがないと思う。車椅子の障害のある人などは、どんなことに手を貸してあげられるか解りやすいと思う。でもダウン症の人はそれぞれ僕たちと同じに違っていて、手を貸してほしいところも違っている。だからこそ、もっとみんなが障害を理解して、その人自身を知ることが大切なんだと思う。

障害のある人ない人を分けないでほしい。僕たちみんな、命の重さは同じなんだから。(おわり)

く。障害がなく生まれてきた兄弟でも、そんなふう

に思うことはあると思うし、兄弟げんかだっつする。姉はやると決めたことは必ず頑張り続けるし、我慢強い。人の悪口も言わないし、人の良いところを見つけ

る。いじめられてもすぐ許すことができる。何でも前向きに考えるし、挑戦する勇氣もある。毎年僕の誕生日に、頑張つて作った手作りのプレゼントをくれる。こんな良いところがある姉なのに、なぜみんな冷たくするのかわからなくてたまらなかつた。ダウン症は姉が病気になるたのでもお母さんが病気になるたのでもなく、千人の赤ちゃんに一人の確率で生まれてくる障害だと聞いた。もしかしたら、僕がダウン症で生まれる可能性だつてあつたはずだ。姉が千人の代表になつて生まれただけなのに、それが分からない人が大勢いる。僕のお父さんは姉を障害児として特別扱いはしない。悪いことをすればすぐ怒るし、良いことをすればすぐほめる。母は姉の障害を知つた時に、ショックが大きすぎて毎日泣いて一年以上家からほとんど出られなかつたそうだ。それでも父はどこにでも姉を連れて行つたと思つた。すごいと思つた。僕は

■2016年、その年の「第40回神奈川県福祉作文コンクール(県社会福祉協議会、県共同募金会主催、神奈川新聞社など後援)「県知事賞」の伊藤大地君の作品、ダウン症の姉のことを書いた『僕の姉』を本紙号外としてご紹介。SNSでも発信したところ、東ちづるさんの目に留まり、有難く二千人を超える方に反響、拡散された。今回、再度ご紹介します。

県知事賞 (2016年)

『僕の姉』

秦野市立南中学校2年 伊藤 大地

皆さんはダウン症という障害を知っていますか。

僕が小学校に入学する少し前に、初めてお母さんと二人だけで遊びに出かけた。どこに出かけたのかは覚えていないが、最後にファミレスでご飯を食べた。その時、僕の姉がダウン症という障害があると聞かされた。当時の僕には難しい話だつたが、僕が小学校に入学したら姉のことで嫌な思いをするかもしれない、でも誰も悪くないから堂々としなさいと言われたことはよく覚えている。

の姉ちゃん、ちゃんとしやべれないんだぜ」とからかわれた。その時何も言い返せなかつた。僕が二年生になった時姉はクラスでいじめられて学校に行けなくなつた。二週間も女の子に蹴られていたり、ひどいことを言われ続けて、身体がおかしくなつてしまつた。学校が怖いと言つていた。やつと姉が学校に行けるようになって、僕も僕も気がなつて、学校に着くと姉の教室をのぞきに行つた。そこにはいつもお母さんがいた。僕が幼い頃からお母さんが「心の強い人になりなさい」と言つていた意味が少しわかつた。学校だけじゃない。家族で出かけた時には、姉をジロジロ見られたり、振り返られたり、指を指されたりする。姉は何も悪くない。僕たちのように障害がなく生まれてきた人でも苦手なことだつてあるし、みんなと同じにできないことだつてあるのに、ひどい人がたくさんいるのが悲しかった。

小さい頃の姉は具合が悪くなると入院することが多かつた。全身の筋肉が弱くて僕たちが簡単にできることでも、姉にとつては大変な時がたたくさんある。そんな大変なことが僕にもわからなく、行動が遅くてイライラする時もあるし、根性のある頑固になる時は頭に